京都市内遺跡発掘調査概報

平成15年度

2004年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

ごあいさつ

京都市は，山紫水明の恵まれた自然と世界に誇る貴重な文化遺産に満ちた日本文化の中核を担う都市であります。市内に存在する，古代から近世までの各時代を特徴付ける貴重な遺跡は，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私たちは，これを後世に伝え残していく責務があります。

しかしながら，今日，埋蔵文化財包蔵地内において土木工事等による開発行為が，規制なく進められれば埋蔵文化財に重大な影響を及ぼしかねません。

本市では，こうした状況を踏まえ，「保存」と「開発」との調整をしっかりと行いながら，貴重な埋蔵文化財の適切な保護に努めております。

さて，この度，平成15年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し，実施したものであります。

各調査の実施に当たり御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導・御助言を賜りました関係機関の方々に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都市の歴史を知り，理解を深めるための一助として，京都を愛する多くの皆様のお役に立てば幸いに存じます。

平成16年３月

京都市文化市民局長

柴　田　重　徳

例　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成15年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。

2　調査地は、下記である。

平安京右京三条二坊二町　京都市中京区西ノ京銅駝町68番地

3　調査は、近藤知子が担当した。

4　写真撮影は、遺構・遺物ともに村井伸也・幸明綾子が担当した。

5　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

6　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はT.P.(東京湾平均海面高度）による。

7　本書で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図（壬生・山之内、縮尺1/2,500）を調整したものである。

8　本書の執筆・編集は近藤知子が行った。

本 文 目 次

平安京右京三条二坊二町

1　調査経過……1

2　遺　構……2

3　遺　物……4

4　ま と め……5

報告書抄録……9

図 版 目 次

図版1　遺構　1　調査区全景（東から）

2　建物（北から）

図版2　遺構　1　泉検出状況（北西から）

2　泉底部断割り断面（東から）

図版3　遺物　出土遺物

挿 図 目 次

図1　調査地位置図（1：2,500）……1

図2　調査区西壁断面図（1：40）……1

図3　遺構平面図（1：200）……2

図4　泉底部断割り断面図（1：40）……3

図5　建物・泉実測図（1：100）……3

図6　出土土器実測図（1：4）……4

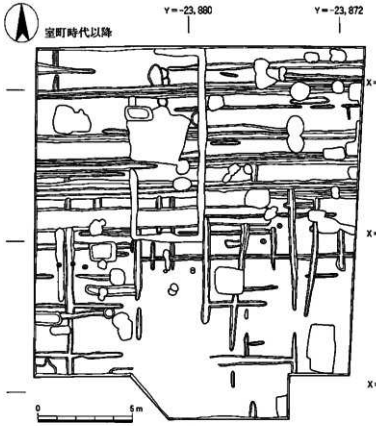
図7　出土瓦実測・拓影図（1：4）……5

図8　右京三条二坊二町遺構配置図（1：1,000）……6

図9　右京三条二坊池・池状堆積出土地点（1：5,000）……7

表 目 次

表1　右京三条二坊池・池状堆積出土地点一覧表……7



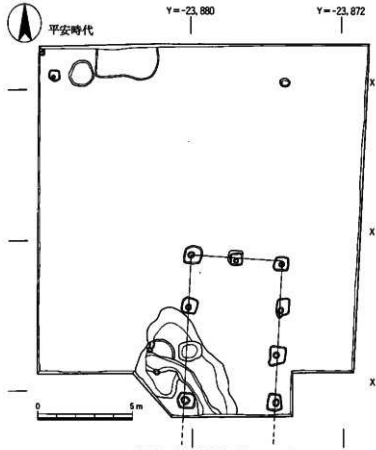


図3　遺構平面図（1：200）

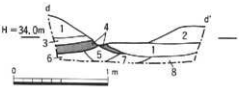
2　遺構(図版1・2)

層序(図2)　調査区の基本層序は調査区西半で、現地表面から現代盛土約30cm、近代以降の耕土約10cm、その下に部分的に5～10cmほどの薄い平安時代遺物包含層（10YR4/3にぶい黄褐色砂泥）が堆積する。この遺物包含層は主に調査区北部で認められ、それ以外の部分は耕土直下で地山に達する。従って遺構はすべてこれら遺物包含層あるいは地山直上で検出した。遺構検出面で確認した地山は調査区の大部分で10YR7/6明黄褐色粘質土であったが、南東部ではその下層の10YR4/3にぶい黄褐色砂礫が露呈する。

平安時代の遺構(図3下図)　調査区中央南部で検出した掘立柱建物1棟、泉、溝のほか（図5）、土壙、ピットなどがある。建物は東西2間、南北4間以上の南北棟で、柱間は2.4m等間、柱穴は一辺が60～80cmの隅丸方形の掘形を持ち、柱当たり径は約25.0～30.0cmである。

この建物に隣接して泉を検出した。泉は径2.5～3.0

mのほぼ円形で、検出面からの深さは約40cm、北西部に30～50cm大の河原石2個を据える。埋土からも同規模の石が複数個出土していることから、2石以外にも化粧の石が配されていた可能性がある。西肩はやや急な斜面をなすが、北と南は底部に向けて緩やかに傾斜する。底部中央が一段深く落ち込みここから南東方向の溝が接続し、調査区外へ延長する。溝の規模は幅約60cm、深さ20cm～40cmで南へ向かって底面レベルは高くなり、調査区南端では幅110cmと拡張する。底部には水の噴出痕と考えられる径20cm程の窪みがあり、この部分を断ち割ったところ、窪み部分から水が噴き出していたことを示す砂の盛り上がった堆積を確認することができた（図4）。また泉のある地点はちょうど地山の粘質土層と砂礫層の境界部分にあたり、このことも付近から湧水があったことを積極的に示す。泉の北と溝の南東はさらに周辺部から緩やかな



1　10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、径0.5～5.0cmの礫
2　10YR7/6明黄褐色粘質土
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥＋5Y5/3オリーブ黄色砂泥
4　2.5Y5/2暗灰黄色砂
5　10YR5/3にぶい黄褐色泥砂＋粗砂
6　10YR4/2灰黄褐色砂泥
7　10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、径0.5～3.0cmの礫
8　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂＋粗砂

図4　泉底部断割り断面図（1：40）

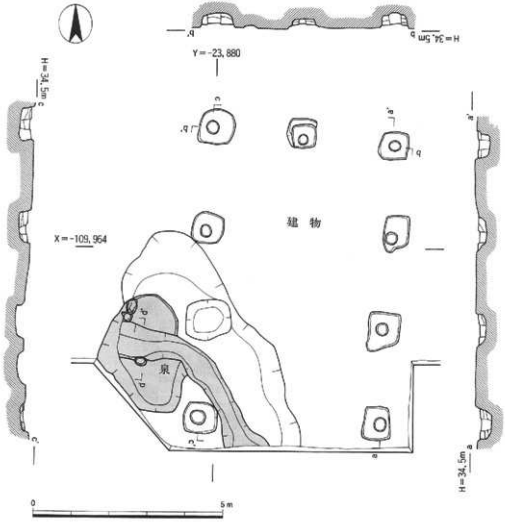


図5　建物・泉実測図（1：100）

傾斜面をなしており、従って検出面では溝を含めて泉より一回り大きな規模で遺構の輪郭線を検出し、埋土上層を掘り下げた後に泉と溝を認識することができた。建物西柱列、北から3基目の柱穴も遺構検出時には確認できず、泉埋土と同じ土が堆積していたため、ともに掘り下げた後に柱穴であると判明した。

柱穴の埋土からは平安時代前期（9世紀代）の遺物が出土し、泉最上層からは中期（10世紀前半代）の遺物が出土した。泉および溝最下層の砂層からは極小片の土器片しか出土せず時期を確定できなかった。

室町時代以降の遺構(図3上図)　溝、土壙、ピットなどがある。溝は東西、南北方向のものを多数検出した。検出面で幅20～40cm、深さ5～10cm程度の浅いものが大半だが、中には深さ40cmのものもある。これらの溝の間隔、切り合い関係に規則性はなく、埋土からは平安時代～室町時代の土器片が少量出土するのみで個々の時期を決定するのは困難であるが、ほぼ室町時代に属する耕作溝と考える。ピットの多くは杭跡であり、これらも耕作地であったときのものであろう。

3 遺　物

遺物は整理箱にして13箱出土した。このうち約半分の6箱は平安時代の泉および溝から出土したものである。室町時代の耕作溝や土壙から出土したものも含めて、大半が平安時代に属する。

平安時代の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、白色土器、瓦器、輸入青・白磁、瓦類がある。土師器は椀、皿、杯蓋、高杯、甕、カマド、須恵器は椀、杯、杯蓋、皿、壺、鉢、甕がある。緑釉陶器は椀、皿、唾壺があり、小片ではあるが内面に陰刻花文を施したものも3点出土している。灰釉陶器は椀、皿、壺、甕がある。輸入陶磁器では、合子や椀などの越州窯青磁片が比較的多く出土している。瓦類の大部分は泉から出土したもので、遺構の中心付近の埋土中層に集中して拳大の礫とともに廃棄されたような状態であった。平瓦、丸瓦の破片がほとんどで、軒瓦は蓮華文軒丸瓦が1点出土したのみである。建物柱穴から出土した遺物は9世紀前半代、泉および溝埋土出土の遺物は9世紀～10世紀中頃に属し、その他の遺構出土の平安時代の遺物もほぼ同時期におさまる。泉と溝の埋土から出土した土器類の器種別の比率は、総破片数831片に対して土師器58.8%、須恵器24.8%、緑釉陶器6.1%、灰釉陶器4.3%、黒色土器2.8%、白色土器2.5%、輸入磁器0.4%であった。

室町時代の遺物には土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦器、施釉陶器、瓦類、石製品がある。

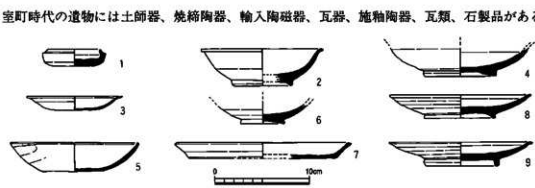


図6　出土土器実測図（1～4：泉出土、5～7：建物柱穴出土、8・9：重機掘削中　1：4）

いずれも耕作溝や土壙から出土した極小片で時期の確定できるものは少ない。

このほか遺構は検出しなかったが、古墳時代の甕などの土師器の小片が少量出土している。

これらの出土遺物は瓦類を除くと大半が小片で、図化できたものは数点にとどまった。

泉埋土から出土した土師器皿（図6－3）は口径10.2cm、高さ1.5cmで口縁はやや強く外反し端部は丸くおさめる。外面底部はオサエ、外面口縁と内面はナデて調整する。内面に黒い炭化物が付着する。輸入青磁の合子身（図6－1）は口径5.5cm、高さ1.8cmと小型で、口縁付近に蓋受けの段が付き、端部は上方に立ち上がる。全面にオリーブ黄色の釉薬が施され細かい陥入があり、底部外面には数ヶ所にトチン痕が残る。青磁椀（図6－2）は口径12.8cm、高さ4.0cmで、口縁が緩やかに外反し端部は外側に丸くおさめ、削り出した低い高台が付く。高台底面を除く全面に灰オリーブ色の釉薬を施し、内面には使用痕と思われる細かい傷が多数残る。これら2点の輸入青磁はいずれも越州窯産で、褐灰色の緻密な胎土からなり焼成も良好である。緑釉陶器皿（図6－4）は口縁部を欠く。底部の径7.5cmで、高台は削り出して形成する。残存部の外面はケズリ、内面はロクロナデ調整で、淡緑色の釉が施される。

建物柱穴埋土から出土した土師器椀（図6－5）は口径13.6cm、高さ3.1cmで、底部から口縁に向かって緩やかに内湾し、端部は丸くおさめる。外面はヘラケズリ、内面はナデて調整するが、器面の磨滅が著しく調整の方向や単位は不明瞭である。須恵器椀（図6－6）は径4.5cmの底部のみで、削り出して低い高台を形成する。高台部も含め全面をロクロナデ調整する。須恵器皿（図6－7）は口径18.2cm、高さ1.7cmで、口縁に向けてやや外反し、端部は平坦である。体部外面と内面はロクロナデ、底部はヘラおこし後、不定方向にナデて調整する。5・6は建物西柱列最北、7は北から2番目の柱穴掘形埋土からの出土である。

この他、遺構にともなわないが完形に近い灰釉陶器皿が2点出土した。図6－8は口径15.0cm、高さ2.5cmで口縁端部は外反し、高台は貼り付けて形成する。明緑灰色の釉が内面と外面の一部にかかり、内面底部にはトチン痕が3ヶ所残る。図6－9は口径15.2cm、高さ2.6cmで口縁端部は外反して平坦面をなし、高台は貼り付けて形成する。内面と外面上方に灰釉がかかり、内面底部に重ね焼きの痕跡が残る。

出土したすべての瓦類のうち軒瓦は2点のみであった。泉埋土から出土した蓮華文軒丸瓦（図7-10）は周縁部と珠文、蓮弁先端がわずかに残る小片であるが、瓦当面の径約15cm、八弁の蓮華文と考えられる。仁和寺境内の調査で同笵の瓦が出土している。[註1] 遺構検出中に出土した唐草文軒平瓦（図7-11）は中心飾り付近の小片で、周縁部は欠く。これもやはり仁和寺出土のものに同笵例があり、主文は外行4転の均整唐草文であることがわかる。

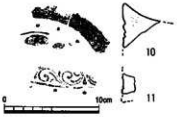


図7　出土軒瓦実測・拓影図（1：4）

4　まとめ

調査の結果、掘立柱建物とこれに隣接する泉および溝を検出することができた。出土遺物から

泉と溝の年代を確定することはできなかったが、建物と泉、柱穴と溝の位置関係などからいずれも平安時代前期に属するもので、泉が最終的に埋没したのは10世紀前半代と考える。これ以後は耕作に関する溝や堆積層しか認められず、これは平安時代中期以降は多くの地域で耕地化が進んだことを示す右京域の他の調査例と一致する。

建物規模は南が調査区外に延長するため不明だが、仮に南北5間とすると泉はちょうど建物の西脇中央にあり、溝は中央柱間を通って南下することになる。ごく浅い所で水が湧き出ていた泉を考慮して、建物が配置されたことがうかがえる。泉から湧き出た水はおそらくは遣水となる溝を介して建物南に展開する池に注がれたと推定できるが、床下に水を通すことで涼をとるための工夫がなされていたのかもしれない。

調査地点は右京三条二坊二町内の中央やや北東にあり(図8)、調査区内は東一・二行、北二・三・四門に該当するが、これらの境界に関する遺構は検出しなかった。建物の位置と規模から少なくとも東一・二行、北三・四門の四戸主以上の宅地規模であったと想定できる。調査区内では建物1棟しか検出しておらず宅地内の詳細は不明だが、泉を利用し園池をともなうことはこの建

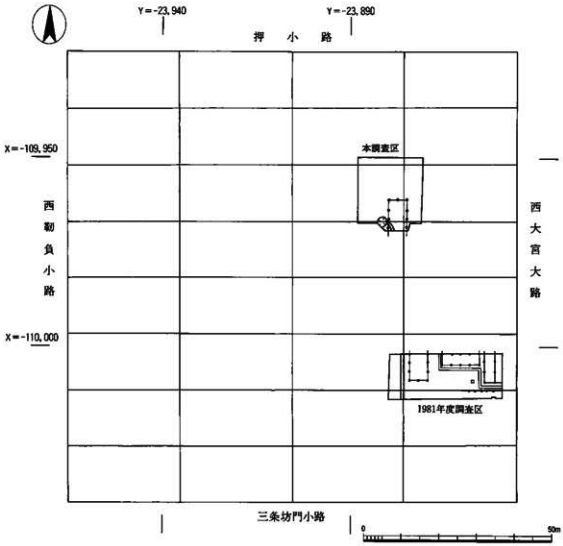


図8　右京三条二坊二町遺構配置図（1：1,000）

物や所有者の性格の一端を示すものといえよう。また1981年度に実施した同町内南東部の発掘調査[註2]では、平安時代中期の掘立柱建物３棟、井戸１基、東一・二行界の溝、北六・七門界の柵列、２棟の建物を取り囲む溝を検出し、建物の規模や配置から少なくとも東一行、北五・六門の二戸主以上の宅地が想定された。これら両調査で想定した宅地規模から、二町東半においては北四・

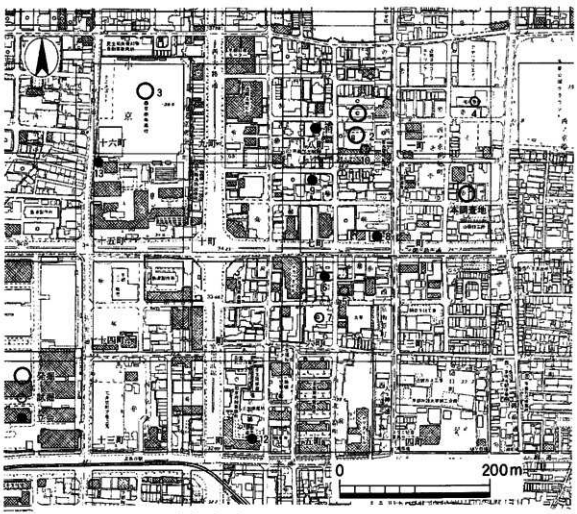


図９　右京三条二坊池・池状堆積出土地点（１：5,000）

表１　右京三条二坊池・池状堆積出土地点一覧表

番号	調査地区	所　在　地	調査概要	備考
1	八町	中京区西ノ京原町97	平安時代の建物、井戸、溝、園池（泉）、川などを検出。	註３
2	八町	中京区西ノ京原町99	１の調査出土園池の延長、柱穴などを検出。	註４
3	十六町	中京区西ノ京東中合町１ （京都市立西京高等学校）	一町規模の豪宮邸宅跡、北半部ではほぼ完全な状態で園池を検出。	註５
4	一町	中京区西ノ京銅駝町48-49-50	平安時代中期の園池を検出。	註６
5	六町	中京区西ノ京南原町10	GL-1.0mで平安時代中期の湿地状堆積。	註７
6	六町	中京区西ノ京南原町29	GL-0.8mで平安時代中期の池状堆積。	註８
7	六町	中京区西ノ京南原町27-1他	GL-1.1m以下、平安時代中期の池状堆積。	註９
8	七町	中京区西ノ京原町177-2	GL-0.95mで平安時代中期の池状堆積。	註10
9	七町	中京区西ノ京原町55-2	GL-0.9mで平安時代前期～中期の湿地状堆積。	註11
10	八町・禅小路	中京区西ノ京原町98-100	GL-1.29mにて平安時代後期の池状堆積、-1.4m柱穴、土壙を検出。	註12
11	八町	中京区西ノ京原町35	GL-0.35mで東西溝、-0.68m以下は平安時代中期以降の湿地堆積。	註13
12	十二町	中京区西ノ京新建町5-21	GL-2.02m以下、平安時代中期の池状堆積。	註14
13	十六町	中京区西ノ京中合町１ （京都市立西京高等学校）	GL-1.32m以下、平安時代中期の湿地状堆積。	註15

五門界に宅地境界があった可能性が高い。

さらに右京三条二坊域における園池の調査例を見ると（図9・表1）、一町では試掘調査で9世紀後半～10世紀初頭の池跡を確認し、南に向かって緩やかに2段の段差をもって落ちる北肩口を検出している。八町では2度の発掘調査で9世紀後半～10世紀前半の掘立柱建物、園池などを検出した。園池は建物南東部に接する直径3.0～3.5mの円形石組み遺構とその南に展開する池跡から成る。池は2時期あり、規模は東西20m、南北30m以上で汀は洲浜を形成する。円形石組み遺構を泉とすれば、未調査である池跡との間に遣水があり池へ水が供給されていたことが想定でき、建物と泉、池の位置関係など本調査と共通する部分もあり興味深い。十六町の齋宮邸宅跡では平安時代中期の園池を非常に良好な状態で検出した。池の最北端の泉は新旧2時期ありいずれも方形横板組みで、新段階ではこれに石組みを組み合わせて意匠としている。池のほぼ中央底部で検出した泉は、平面方形の素掘りであった。また五～八町および十二町でも立会調査で平安時代前期～中期の池状堆積を確認している。このように三条二坊域では各所で園池に関わる遺構や堆積を検出しており、宅地内に池を有する邸宅が複数所在したことがうかがわれる。また当域で検出する井戸も比較的浅いことから、付近は湧水が豊富で池の築造に適していたことがわかる。なお平安京内における泉の調査例は本調査が4例目で、上述の3基を含めた4基すべてを右京三条二坊域で検出したことになる。

このように調査で検出した遺構は右京三条二坊二町内における宅地の利用状況の一端を明らかにし、同域に比較的多く見られる園地をともなう邸宅が存在した可能性を示すものである。

註1　『仁和寺境内発掘調査報告』－御室会館建設に伴う調査－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊　㈶京都市埋蔵文化財研究所　1990年

註2　平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』京都市文化観光局　1982年

註3　堀内明博・木下保明「平安京右京三条二坊」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1989年

註4　辻裕司「平安京右京三条二坊1」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1994年

註5　『平安京右京三条二坊十五・十六町』－「齋宮」の邸宅跡－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊　㈶京都市埋蔵文化財研究所　2002年

註6　馬瀬智光「平安京右京三条二坊一町跡　№40」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成8年度』京都市文化市民局　1997年

註7　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局　1983年

註8　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年

註9　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局　1988年

註10　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』京都市文化観光局　1984年

註11　註6に同じ。

註12　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局　1986年

註13　『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』京都市文化市民局　1998年

註14　『京都市内遺跡立会調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　1999年

註15　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年

報告書抄録

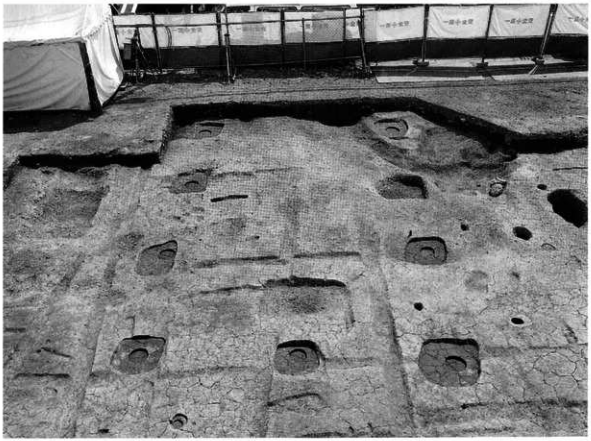
ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成15年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	近藤知子
編集機関	財京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL075-222-3108
発行年月日	西暦2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京右京三条二坊二町	京都府京都市中京区西ノ京病院町68番地	26100		35度0分30秒	135度44分17秒	2003/8/1～9/10	309㎡	個人住宅兼集合住宅建設

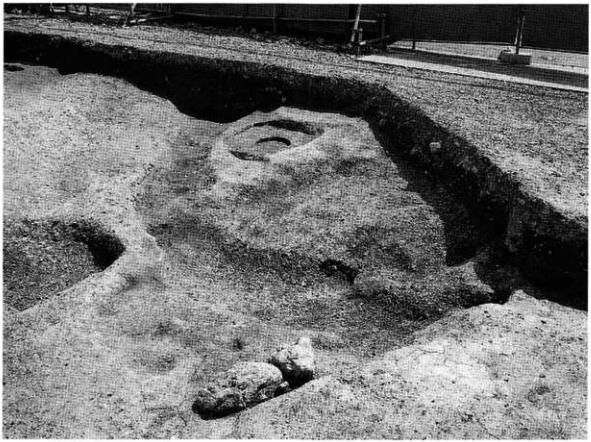
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京三条二坊二町	都城跡	平安時代	建物・泉	土師器・須恵器・緑釉陶器 輸入陶磁器	

図　　版

1　調査区全景（東から）



2　建物（北から）



1　泉検出状況（北西から）

2　泉底部断割り断面（東から）

1

3

2

5

7

8

9

10

11

出土遺物

京都市内遺跡発掘調査概報

平成15年度

発行日　2004年3月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　㈶京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 415-0521
印　刷　真　陽　社